

『シン・別府学』 Vol.6

藤田洋三「市民の暮らし」

幼少期から職人に関心を持ち、緑ヶ丘高校卒業後からカメラマンとして活動を始めた藤田氏。本講座では、江戸時代から現代にかけての資料と、東別府から関の江までの海岸線を撮影した写真を紹介しました。

講演は、「地球がどっち側に回っていると思う?」という問いかけから始まりました。藤田氏は「そういうことを考えることが大事です」と言い、1枚の写真のなかに含まれる情報を「読む」ようにして解き明かし、そこに込められたエピソードを「市井の記憶」として紹介していきました。

藤田氏は「江戸時代に大分に行くのは命がけでした。旧道の高崎山の山越えをしていたんです」と語りながら、東別府駅から降りた波打ち際の写真を見せました。やがてこの海岸沿いには木綿が植えられます。木綿は土中の塩分を中和するので、穀物などの栽培に適さない土地でも栽培ができたのだそうです。「これが、かつて別府の特産として知られた別府絞りにつながっていくわけです。木綿の栽培も絞りの技術も、別荘文化が栄えた時代の建築技術も、ルーツは大野川の河口域にあると考えています」と藤田氏は推察します。

このように、正式な記録は残っていなくても、職人をはじめとする当時の記憶が残る人々の言葉を集め、同時代の写真からそれを裏付ける情報を得ることによって、藤田氏は「市井の記憶」を読み解いているのです。

明治時代の写真には、いりこ漁の船が映っています。当時の記憶のある人たちが「魚を釣りすぎて漁船が沈んでしまった」など、枝葉をつけて話すことに藤田氏は興味を持ちます。「いりこ漁の漁師さんは「小さいいりこでも、大きなくじらでも命は1つ」と言っていました。どんな生き物でも命は1個しかないということを教えてくれたんです」と、自身が関心を持った職人の言葉を一部紹介し、「ちなみに、いり

こを干すかごは別府の竹細工で作られていました」と付け加えました。

当時は東別府から亀川まで、銀色の絨毯のようにいりこが広がっていたそうです。しかし、この銀色の絨毯のあった海岸は、のちに埋め立てられてしまいます。埋め立て後は別府湾で鯛や鮪がよく獲れたそうで、釣り船が集まっている写真も残っています。「当時はまだ手漕ぎ船でしたから、腕の筋肉が発達した人がたくさんいました。剛腕で知られた稲尾投手は、そんな環境から生まれたのかもしれませんが」と推論を述べました。

100年ほど前の写真には「泥漕ぎ」のようすが写されていました。これは海底に沈む泥からエビをすくいあげる漁法です。今この漁をできる人は別府にはいませんが、これを高浜虚子が俳句に詠んでおり、技術は失われてもその光景は文学として残されています。「古くは万葉集に別府湾が詠まれました。昭和には四国の洋画家、猪熊弦一郎が別府を描きました。そのほかにも、多くの文化人が別府を訪れ作品を生んでいます。経済が集まるところにアートが発生するんですね」と藤田氏は解説しました。

「亀川の埋め立てが完了すると、魚市場が浜脇から亀川に移動します。別府湾ではかつてはポンポン船の漁も見られました。昔はウミガメも産卵に来ていた。かつては盛んだった地引網も少なくなり、漁師が網の補修をする光景も見られなくなりました」と、海にまつわる人々の暮らしを映した写真を多く紹介しました。

「これらの写真は、我々が失ったものを示しているように感じます。ぜひみなさんには「10年後20年後にどうあるべきか」「なにを次代に残していくべきか」を考えていただきたいですね」と藤田氏は熱を込めて語りました。